

## 『マタイによる福音書』

## 読解に際しての7項

北岡 崇

本稿は、『マタイによる福音書』読解に際し注意すべき重要な事柄を思いつくままに考察しその考察を便宜上七項目に分節化したものである。分節は後でつけたもので、各分節ならびにそれら相互間の関係に、若干、不明瞭な点が残るかもしれない。全体として、わたしという現代に生きる一人の人間、一世紀のクリスチャンが理解しバイブルに表現したイエス、そして歴史的に見ればその間に位置するアンチ・クリストの思想家であるニーチエ、これら三者を、想像力の中でつぎ合わせ考察した結果である。

## 【聖書全体についての知識の重要性】

『マタイによる福音書』は、イエスの弟子の一人マタイ（『マタイによる福音書』第九章第九節を参照）がイエスの宣教活動を中心に記した書物であり、一括して新約聖書と称される二十七点の文書の冒頭に位置する。これは、聖書と総称される総計六十六点（旧約聖書三十九点、新約聖書二十七点）の文書の中の一つでもある。思想

としてみれば、聖書とは相互に関連し合う六十六点の文書が全体として形成する統一性を持った思想のことであり、この思想空間が、聖書の世界、聖書の思想空間である。したがって、『マタイによる福音書』の思想を掴みとろうとするなら、これを六十六点の書物の一つとして読もうとする姿勢が必要であるし、聖書全体がどのような書物であるのか、聖書は人々に何を伝えようとしているのか、人間にとってどのような意味を持つ書物であるうとしているのか等について予備知識を得ておく必要がある。

そのため、『マタイによる福音書』を順次、章を追って読み進める際も、現に読み進める文章や語句が聖書の他の六十五点の文書とどのような思想連関のもとに語られているのかを解明する補助的な作業が必要になる。こうしてはじめてわれわれは『マタイによる福音書』を、聖書全体の思想空間を形成する一冊の書物として、またそれにとどまらずその思想空間の核心を成す特に重要な一冊として理解し、その思想をよりよく理解できるようにする。こうした理解は聖書に関する合理的理解に立ち入るためには必要なことであるし、こうした理解を通してわれわれは、極東の地に住みしかも現代に生きるわれわれにはあまりなじみのない思想空間に徐々に足を踏み入れていくという体験、風変わりな魅力的な思考体験、広大な思考の世界における異文化体験旅行を行うことができる。

## 【美しいことは人を育てる】

とはいえ、『マタイによる福音書』並びに聖書の諸書の魅力は、別のところにもある。それは、数多くの美しいことばを見出すこと

ができるという魅力である。美しいことば、すなわち深く澄み切った水のようなことば、とでも言おうか。これは、文学作品（詩書と云う）として分類される『ヨブ記』、『詩篇』、『雅歌』、『箴言』などにおいてのみ言えることではない。『創世記』、『出エジプト記』等の歴史書（史書と云う）、『イザヤ書』、『エレミヤ書』、『エゼキエル書』、『ダニエル書』等の預言書、われわれは六十六点のすべての文書に、美しいことば、澄み切った深い水のようなことばを見出すことができる。太陽が草木を育て、水が生命を養うように、美しいことばは読む人の心を潤し育てる。美しいことばに出会う時、人は、自分の感性や知性がまともなものへと調整され訓練され鋭敏になるのを自覚する。つまり、自分の生活（実はこれがわたしの精神）が養われ強化され築き上げられていくのを自覚する。聖書が二〇〇〇年、あるいはモーセ以来三〇〇〇年以上の長きにわたって、つまりさまざまの時代を超えて、多くの民族の興亡や国家の盛衰、諸言語の生成消滅さえも超えて読まれ続けてきた理由は、つまるところは、読む人の実感、自分の生活、精神、自分の内なる生命、人間性、心が養われるとの喜ばしい自覚、実感にあったのではないだろうか。わたしは、聖書の中に自分を、また人間を育てる良いことば、美しいことばを見出せるような読解を進めていきたい。聖書の中にこうしたことばをいくつも見出せたら、わたしの読解もとりあえず出だしは順調ということである。その後の解説の進展の成否は、そのことばの美の導きに従うわたしの感受性、思考および判断の刻々の活動にゆだねられている。つまり、わたしの日々刻々の活動がそのことばをどのように育てていくかということが最も大切な事柄となる。

#### 【イエスは実践の人であった】

わたしは、イエスが語ったとされる美しいことば、イエスが行ったとされる美しい行状、善意に満ちた、力強く頼もしい、飾り気のない素朴なことばや行状と出会うことができるだろうか。そこからわたしはわたし自身を育むどのような糧を手に入れることができるのだろうか。イエスは実践の人であった。日々の生活においてただひたすらに、天の父なる神と、出会うそのつどの隣人への愛に生き実践の人であった。イエスは詩人のように、美しいことばをしばしば語っている。イエスは一言も語らないときでも、その行状、その喜びの表情や笑い声や悲しみの表情や涙や苦悶や怒りさえもがすでに素朴に美しい詩であったし、その存在自体が詩、その生は歩く詩、素朴ながらも美しい歩く詩であった。すぐれた実践の人は、つねに、すぐれた詩人以上に詩人である。その人の頼もしい行動、善意あふれた行動、力強く確信に満ちた行状は、すぐれた詩以上に、その場に居合わせた人々の心を深くその基底から捉える。美は強力である。イエスのことばをいくつか聞いただけで、あるいはイエスの表情にその感情を一度きり目撃しただけで、自分の存在を基底から揺り動かされ、そこに美の泉がうがたれるのを実感し、イエスの行いの正しさに深く納得し、その後の自分の生活全体をイエスの行状に合わせたいと願うようになった人々も、決して少なくなかった。美しいことばや行状が仲立ちとなつて素朴なかたちで深まっていくこうした信頼に裏打ちされた理解、承認、納得は、聖書に関する知識や学問が行う合理的理解や理論的説得に比べれば、はるかに強力である。一般に言えることだが、知識や学問や技術が人を物知りにな

することに間違いはないが、意外なことに、その人の知恵は皮相で表面的で、非力である場合が多い。人間の生活すなわち精神の育成、人間性の陶冶という一点において重要な役割を果たすことは稀である。

### 【聖書からの音信】

人間は誰でも、自分の生活の意味を深く納得できるとき幸福を実感し、自由を実感し、生活に手ごたえ、喜びを感じる。一言で言うなら、聖書は全体として、各々の人間に生活の意味を伝えようとする書物である。普遍的妥当性をもつ生きる意味を、万人に對し分け隔てなく伝えようとする書物である。普遍的妥当性をもつ生きる意味、これは、自分の経済生活の好転とか、身の回りの誰よりも広範な知識を持つこととか、身体が健康であることとか、美しい容姿を獲得することとか等々に期待される幸福、生活の世俗的な意味とは異なる次元に所属する意味である。その聖書の言う人間存在の意味が各個人によって生きがいとして意識され、各個人の生活の基本原則として受容されるにいたるかどうかは、その人自身の自由、すなわち感受性と思考と判断にもよるが、聖書そのものは、各々すべての人間に、生きがいを伝えようとする。聖書は、各々すべての人間にその生活の意味を意識させ、その人に幸福を約束する書物、自由を実感させる書物、手ごたえと喜びを伴う生活を約束する書物であろうとしている。

そうであるにしても、幸福や自由はいつになっても決して享受できない夢のようなものではないのだろうか。手ごたえと喜びを絶え

ず見出すことのできる充実した人生などありえないのではないだろうか。これが、われわれ現代人の素直な生活感覚であろう。こうした夢や希望の実現は、社会的、歴史的、地理的、身体的、人種的、経済的、政治的、自然的、心理的、等々、数え上げればきりのないさまざまな不都合な事情（各個人の日々の生活に関わる親子、夫婦、兄弟など家族の事情、友人や恋人などとの人間関係、そこに絡みつく貧困や富の過剰に由来する諸問題、就労事情、学歴、履歴、家系、性差や人種や民族に関する無数の根深い偏見、身体や精神上の不調や「疾患」等）によって阻まれているというのがわれわれ現代社会に生きる者にとつてのリアル、つまり生活感覚ではないだろうか。極論すれば、現代人は、自分たちは、死以外には出口のないこの世界というひどい小部屋に閉じ込められているとの無力感、絶望感を多かれ少なかれ共有しているのではないだろうか。多種この上ない諸問題の各々について、数多くの研究者等が調査し資料集成し、対策を考案し改善を試みても、相変わらず問題が残るとするのが現代社会ではないだろうか。実は、これは現代に固有の事柄ではない。長い人類の歴史を反省してみても、上記の類のさまざまな問題はいつの時代にもあったということ、またいつの時代にもそれらの問題の解決を目指す企てや努力が個人レベル、家族レベル、各種組織のレベル、部族レベル、民族レベル、階級レベル、国家レベル、世界レベルにおいて繰り返されてきたこと、それでも人類はそうした問題の解決に達したことはまだかつて一度もなかったということ、一時、解決策と思われたことも別の問題を引き起こすのが常で、問題を複雑化しつつそうこじらせることや、もつとひどい問題を招く

こともしばしばであったということ、これらのことをわれわれは、再認識するだけではないだろうか。こうしてわれわれは、人類の歴史を反省すればするほど、人間は幸福や自由や喜びを求めつつもその求めが十分に満たされることは決してないという思いを深めるばかりではないのか。それゆえ、われわれ現代に生きる者たちだけが、自分の人生全体の意味を見出せないまま、無駄に生きて最後に死んでいくという感情に圧倒され日常生活を営むのではない。これは、何ら現代人に固有の特別な生活感情ではない。古来、こうした生活感情をもって多くの人々は生きてきたのである。歴史を通して、個々ではなく、人類全体の非力と悲しみを、われわれは認識できる。人類は常に「貧しさ」を抱え「貧しさ」を意識して歴史を紡ぎ生きてきたのだ。

個々の人間は、あるいは勤勉な労働によって、あるいは野心的な企画や賭けによってこの「貧しさ」に対処してきたし、多くの家族や志を一つにして硬く結束するグループや狭い地域社会は、つつましくも密度の高い協力・連携を通してこの「貧しさ」の中にあってもわずかな潤いを見出そうとしてきた。これらよりはるかに強力な国家や民族はそれぞれの流儀で大義を標榜する思想、つまり各々に固有の国家主義や民族主義という徹底的に排他的かつ閉鎖的な利己主義に走り、「貧しさ」という苦境からの脱出を企ててきた。この利己主義は、すべての人間が共有してきたし、現に今も共有している生活の原則であり、その原則への依存の度合いに応じて人間は、他人と競争することや自身を他人と比較することは言うまでもなく、他者や自身を傷つけることにさえためらいを感じないという感

性、時には殺害することにさえためらいを感じないという感性を備えるにいたったのである。人類の歴史を通覧し、人間存在の諸相を考察し、反省した人の目に映じる人間の姿とは、まさに荒野、あるいは砂漠の中で後先よくも分からぬままに必死に生き延びようとするわれわれ自身の姿である。これは、聖書に記された「茨とあざみ」の生える荒地に追放された人間の姿そのものである（『創世記』第三章第十八節を参照）。聖書の描く人間のイメージは、人間存在の意味をめぐって現代人が抱く原風景、自画像と寸分たがわずびつたりと重なり合う。

荒野であり砂漠であるような現代社会に身をおいて、幸福で手ごたえのある生活の不在（貧しい心、満たされない心）、自由で喜びに満ちた生活の不在（貧しい心、満たされない心）を痛感しつつも、それにもかかわらず、われわれは、依然として、最も深い人間の本性からして当然のこととして、心の充実を真剣に求め続ける。それを諦めきめることは絶対にできない。その時々やささやかな目的の達成では充足できない心（満たされない心、貧しい心）を抱えながら、まだ経験したことがない喜び、生活そのものを全体として肯定するような充実した幸福感、生活の手ごたえ、自由を真剣に求める欲望は、常に人間を歴史の新しい次元へと駆り立てる。また、むしろ歴史の終末の到来を待望させる。そのような人にイエスは「心の貧しい人々は、幸いである。天の国はその人たちのものである」（『マタイ』による福音書』第五章第三節）と語りかける。さらにまた、「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる」（『マタイ』によ

る福音書』第七章第七節)と語りかける。聖書は(特に『マタイによる福音書』など四つの福音書はきわめて直接的に)、「貧しさ」を自覚する人間に、自由、幸福、充実した生活、生きがい、喜びが準備されていると語り、それを与えようとする。

旧約聖書からも引用しよう。『イザヤ書』第三十五章には、神の祝福を得た大地について、神がイザヤに語るよう託したことばが記されている。二〇〇〇年以上昔の時代から聞こえてくる、また翻訳言語のよそよそしさの向こう側から響いてくる聖書の語りかけに耳をすませ、黙読してみよう。

荒野と砂漠は楽しみ、荒地は喜び、

百合のように花咲き乱れ、

みごとに花咲き乱れて、

喜びに喜んで歌う。

レバノンの栄光と、

カルメル(注: イスラエル北部の南北に伸びる丘陵地)やシヤロン(注:

テル・アビブから北のカルメル山に至る、地中海に面した肥沃な平原)の

威光が、これに授けられるので、

彼らはヤハウエの栄光、われらの神の威光を、見る。

あなたたちは弱った両の手を強くし、

よろめく両の膝を堅くせよ。

心騒ぐ者たちに言え、

「強くあれ、恐れるな。

見よ、あなたたちの神を。

復讐が、神の報いが来る。

この方は来て、あなたたちを救う」と。

その時、盲たちの目は開かれ、

耳の聞こえない者たちの耳はあけられる。

その時、足なえは鹿のようにとびはね、

口のきけない者の舌も喜び歌う。

荒野には水が、

流れが荒地に、湧き出るからだ。

灼熱の地が沢に、干からびた地が水の噴き出す所に、

ジャッカルどもの寝ぐら、その伏す所が、葦やパピルスの

茂みに、なる。

そこに一本の大路があり、

その道、それは聖なる道と呼ばれる。

穢れた者はそこを通ってはならない。

これは、彼ら(文語訳では、主の民)のためのもの。

道行く人も愚か者も、これに迷い込んではいならない(文語

訳では、おろかなりとも迷うことなし)。

そこには、獅子もおらず、猛獣も上って来ることなく、

その姿すら見られることはない。

そこを歩むのは、贖われた者たち。

ヤハウエに買い戻された者たちが帰還する。

彼らはシオン(注: エルサレムの古地名でシオニズムの語源)に喜び

歌いながらやってくる。

永久の愉悦がその頭に。

歡喜と愉快は迫り、  
そして悲哀と嘆息とは消え去るのである。

〔『イザヤ書』第三十五章全文〕

【〈悪〉、あるいは善と善】

人々が幸福に生きることを阻むもの、自由に生きることを阻むものの、充実した日々を過ごす邪魔をするもの、とりあえずそれら邪魔するものを一括して〈悪〉と呼ぶなら、われわれの生活において〈悪〉の存在は否定しがたい。むしろ、〈悪〉は、日常茶飯事でわれわれの生活のいたるところで顔を出し、われわれの平安を乱し、夢や希望を砕く。また同じことだが、われわれの欲望の充足を阻む。しかし、聖書によれば、神ヤハウエは、悪とその原因を根絶すると、そしてわれわれを祝福された大地へと導くと、約束する。聖書は悪の根源が何であるかをわれわれに告げるとともに、神ヤハウエがその根源を取り除く時が来るとの福音（『マタイによる福音書』第三章第二節や第十章第七節では「天の国は近づいた」という音信）をわれわれに伝える。それゆえ、われわれは、聖書を読む際に、そもそも悪とは何なのか、悪は何に起因するのか等の問題についてあらためて思いを巡らし思考を深めることになる。たとえば、わたしは他者にとって〈悪〉であるか、他者はわたしにとって〈悪〉であるか、またわたしの希望や欲望は他者の希望や欲望にとって〈悪〉であるか、他者の希望や欲望はわたしの希望や欲望にとって〈悪〉であるか、さらにはわたしを支えるが時にはわたしの夢や希望を砕くわたしの属する家族や国や地域や様々な組織は〈悪〉であるのか、そ

うではなくわたしの希望や欲望が〈悪〉であるのか等々の問題を思考せざるをえなくなる。この〈悪〉をめぐる思考の広がりや深まりに相応しく、同時にわれわれは〈善〉とは何かをも思考せざるをえなくなる。そして、〈善〉と〈悪〉に対する粘り強い思考が、わたしを、万物を創造する唯一の神、トーラーや聖書やクルアーンの言う神、つまりモーセやイエスやマホメットが語る神へと導いていくのかもしれない。少なくともそうした認識にまではわれわれを連れてゆこうというのが、聖書の意図であり、また『マタイによる福音書』の意図であることだけはたしかである。しかし聖書は同時に、自力のみを頼みその究極の認識、究極の地点までこの道筋をたどることができる者は誰もいないとも語る。個人のみならず、民族にせよ、国家にせよそれをなし得ないと言う。その道を行く者が、万物を創造する唯一の神の存在を承認するには至らずその前のいずれかの地点でその者自身の思考と判断に自閉するなら、〈善〉と〈悪〉については、それぞれの多元性と相対性を主張することで終結する他ないであろう。実際に日々を善悪の葛藤にもがき生活する者から見れば他人行儀な一般論としか思えないだろうが、善も悪もそれ自体としては存在しない、存在するのは事柄に対する善悪の評価だけであるというわけだ。わたしの観察によれば、大多数の現代人の思考はこの類に一括される。

「道徳的な現象などというものは存在しない。あるのは現象の道徳的な解釈だけだ」（『善悪の彼岸』第四章第一〇八節）と言うニーチェの思考ももちろんこの類に属するのだろうか。とはいえ、「愛からなされることは、いつも善悪の彼岸に生じる」（『善悪の彼岸』第

四章第一五三節)というニーチェは、善悪の問題を、この類の人間の誰よりもはるかに徹底的かつ広範に考え抜き、善悪の問題に関する通常の思考を突破する認識にまで達しているとだけは、ここに付言しておく。

自然学(物理学等)、生理学、医学、法学、社会学、経済学、心理学などの諸科学、また国家や政治や各種組織の慣習は、人間の理性や構想力の活動の産物であり、人類の知的財産ないし遺産とも言うべきものであり、人間活動の成果である。しかしこれらをもつてしても、善悪を巡る形而上学の問題は、決して理論的解決をみることはしない。それは、善悪が、根源的には人間の理性や構想力によっては決して解き明かせない自由意志ないし欲望の産物だからである。人類の理性や構想力はそれ自身の「貧しさ」を越えることはできない。

### 【インスピレーション】

聖書は倫理への思考や意識を刺激する書物であり、その意味では倫理学のテキストとしての一面を持っている。しかし聖書は本来的には、倫理学のテキストにとどまるものではないし、倫理学のテキストであろうとはしていない。聖書は倫理や道徳のテキストのように、人々に説教したり人々の生活態度の変化を促したりすることもあがるが、聖書が本来、人間に求めるものはそれ以上のことである。聖書は回心を、あるいは神への献身を、人間がその過去に死んで新生を、神への愛と実際の生活の中でそれを証する隣人への愛に生きるといふ新しい生を生きることを求める。聖書には、古い人をその

行いとともに脱ぎ捨て新しい人を身に着けるといふ表現が見られる(『コロサイの信徒への手紙』第三章第九節から第十節を参照)。聖書は個々の人間に付属するさまざまな特性のいくつかをその時々々の環境や組織や個人に固有の目的によりいっそう適合させるために、補強したり訓練したり改善したりするためのマニュアル本やハウツー本や啓発本であろうとはしていない。聖書は、読む人に神ヤハウェへの愛と隣人への愛を端的に命令する(『マタイによる福音書』第二十二章第三十四節から第四十節)。命令するのは、パウロによれば、神である。「聖書はすべて神の霊の導きの下に書かれ、人を教え、戒め、誤りを正し、義に導く訓練をするうえで有益です」(『テモテへの手紙二』第三章第十六節)と記されている通りである。聖書を構成する六十六点の各文書には、もちろんそれらの文書の記者が何十名もいる。モーセ、イザヤ、エレミヤ、エゼキエル、ダニエル、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ、パウロ、ヤコブ、ペテロらである。これらの記者は全員が人間である。しかし、彼らが記した聖書は、全体として、われわれ人間に対する神からの音信、あるいは神が人間に伝えよと記者たちに命じたことばとして記されている。つまり、本来的には神のことばとして理解されようとしている。『テモテへの手紙二』に記されているように、聖書全体が、神からのインスピレーションによる(「神の霊の導きの下に書かれた」ことばであるというわけだ)。

それにしても、人間が記した文書を神が書いたものだと主張するこの事態、あるいは神が記者に記させたのだと主張するこの事態を、われわれはどのように理解すればよいのか。論理的にはこれは理解

不可能な事態であり、不思議な事態である。各々の記者が自らを神と自称することはなく、神は彼らにとつて他者であるから、この問題は、インスピレーションとか、靈感とか、存在のことばとか、他者のことば、等をめぐる難問と同じ水準の難問であるとならざるまでも、等しい。さらに、対話、コミュニケーションの可能性、等をめぐる難問と同じ水準の難問であるとも言えるかもしれない。いずれにせよ、これらはすべて、容易にはわれわれの理性によつて解き明かすことのできない問題である。あるいは、この問題を解く鍵を、動植物とのふれあいを日常的に深めている人々が、例えば犬や猫や季節の花々と非言語的だが豊かなコミュニケーションを楽しむという事態に求める人もいる。植物の発芽や開花の待ち水遣りや土寄せや日差しに注意を払い、時にはそのものたちに話しかけさえする園芸家は、花々の語ることばが理解できる、と聞く。信仰に生きる者は日々の祈りにおいて神との交流を深めることで、次第に神のことばを理解できるようになるというのも同じことなのかもしれない。他者の声への聴力、感受性が、日々の生活、実践を通して身につくという発想である。これは、分かりやすい例である。他者と言えば、たしかに神も他者、植物も他者である。他者も、それと親しむことによつてその声を聞き分けることができるようになるという理屈は分かりやすい。

ダビデの詩には「天は述べる 神の栄光を、御手の業を告げるは蒼穹。昼は昼に 言を發し、夜は夜に 知識を告げ知らず。言も無く 語も無く、彼らの声の 聞こえることもなく。彼らの声は 全地に出で、彼らの語らひは 大地の果てに」(『詩篇』第十九編第二

節から第五節)と記されているし、パウロは「世界が造られたときから、目に見えない神の性質、つまり神の永遠の力と神性は被造物に現れており、これを通して神を知ることができます」(『ローマの信徒への手紙』第一章第二十節)と記したように、自然の全体と部分に及ぶ美と調和は神の存在を雄弁に語るに聖書は言う。また、こうしたことばの背景をなす自然観が近現代の自然科学のごく初期において人間の探究心を刺激してきたのは、事実である。神のことばは聖書だけでなく、自然にも記されているのだから、自然を研究することによつて、神の意図を知ろうという探究心である。自然という被造物、その中には動植物も存在するのだから、そこに神のことばが記されているのなら、先ほどの園芸家も植物の生育をつぶさに眺めそれらとともに生きる人が神のことばや意図の若干を感受するという事態もありうるのかもしれない。実は、こうした思考は神存在の素朴な証明、自然神学的証明とまったく同一の構造を持っている。

#### 【神存在を考えるとということ】

ここにいう神とは聖書のいう神、人間を含め宇宙に存在するすべてのものを創造しそれらを維持し導く唯一の神のことである。この意味での神の存在を証明しようとする試みはヨーロッパの思想の歴史において繰り返しなされてきた。イマヌエル・カントは一七八一年に発表した『純粋理性批判』第一版の「超越論的弁証論」において、神の存在証明として、存在論的証明、宇宙論的証明、自然神学的証明の三種を挙げ、その上で、第三の自然神学的証明の根底には



第二の宇宙論的証明があり、第二の宇宙論的証明の根底には第一の証明、すなわち存在論的証明があることを示し、要するにすべての神存在の証明の根底には存在論的証明があることを明らかにした。

ところで、われわれの考える証明とは普通は、証明すべきその事柄を目の前に突きつけること（実証）によるか、理性的な推論を介して証明すべきことを帰結として示すこと（論証）によるのか、あるいはそれらの結合によるか、これら三者のいずれかによる。しかし、考えてもみよ。眼球にせよその機能にせよ、正確な論理を辿る理性にせよ、これらを通してその存在を証明しようとしているものはほかでもない、神、万物を創造する唯一者としての神、宇宙を創造し、無数の星を創造し、地球や大陸や大洋、また植物や動物を創造し、眼球やその機能や理性を備えた人間を創造するとともに、それらを日々維持する神である。このような存在の証明をそもそも人間はなしうるのだろうか、こうした証明は人間理性の力を超えているのではないだろうか。カントもまたそのように考えた。いや、たんに考えたというのではなく、人間の理性と感性をもつては神の存在の理論的証明等の形而上学の問題は解決できないということを証明した著書こそがカントの名著『純粹理性批判』であった。人間の能力のこうした限界への反省をふまえて、われわれは、「貧しさ」のさなかに生きるわれわれにとつて人生の意味とは何か、何を愛すべきであるか、自由とは何か、実践とは何か等の問題へと導かれてゆくことになる。

『マタイによる福音書』読解講義の初回は上記のようなものである。

【注】旧約聖書からの引用は、岩波書店刊行の『旧約聖書Ⅰ』創世記（1997）、『旧約聖書Ⅱ』イザヤ書（1998）、『旧約聖書Ⅲ』詩篇（1998）による。新約聖書に所収の『マタイによる福音書』、『ローマの信徒への手紙』、『テモテへの手紙Ⅱ』、『コロサイ人への手紙』からの引用はすべて、共同訳聖書実行委員会「聖書 新共同訳——旧約聖書統編つき」日本聖書協会発行、1989、による。ニーチェの『善悪の彼岸』からの引用は、Kroners Taschenausgabe Band 76/1976 (Jenseits von Gut und Böse, 1886) により、当該箇所の章節の番号を示した。

